

語彙力アップの試みとしての「私の語根リスト」、 「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成

中 道 嘉 彦

1. はじめに

筆者が高校生の頃、**disease**「病気」という単語は「反対あるいは否定」の意味を持つ部分 **dis-**と「安楽」の意の名詞 **ease** が合体した語なので、「安楽の反対」、すなわち「(心身が)楽ではないこと」、言い換えると「不快」、「病気」という意味になる、と教わった。それまでは単語を1つ1つ覚えるのに苦労していたが、長めの単語は幾つかのパーツからなり、各パーツの意味を足していくと全体の意味になるということがわかり、妙にホッとした記憶がある。大学生の頃、**inconvenient** は「反対あるいは否定」の意味を表す **in-**という接頭辞が **convenient**「便利な」にくっついて「不便な」という意味になるが、**illegal**「違法な」の場合は **legal**「合法的な」に **il-**が付いており、**irregular**「不規則な」は **regular**「規則的な」に **ir-**が付加して、その結果「不規則な」という意味が生じる。しかしこれらの例は上述の **inconvenient** と同じ構造を持っているようだが、なぜ「反対あるいは否定」の意味が **in-**、**il-**、**ir-**の3通りの形（いずれも **i** で始まり、2つ目の綴りが微妙に異なる）をとるのか、不思議に思った。教員になってから、ある読み物に **aggrandize** という動詞が出てきた。意味を調べると「…を拡大[増大]させる、誇張する」とある。更に語源を調べると、中央に **grand**「大きい」が入っているではないか。道理で **aggrandize** には「拡大、増大、誇張」といった意味が含まれているのか、納得がいった。

英語の4技能の修得、実力の伸長には語彙が重要な役割を担っている。私たちが語彙を増やそうとするときには、何度も口に出したり書いたりして頭

に叩き込もうとする。しかし、ただ機械的に覚えるには限界があるし、第一面白くないと思う。また検定試験などで上のレベルを目指そうとすると、やたら長い専門用語が出てくるが、それらを自分のものにならねば相当な時間とエネルギーが必要で、多くは途中で努力することを放棄してしまうのではないか。興味深く、より効率的で、なるほどと納得でき、しかもきちんと頭に定着するような方法はないだろうか？そこで思いついたのが学生一人一人に「私の語根リスト」と「私の接頭辞・接尾辞リスト」を作成させ、語の仕組みを理解させる方法である。

筆者は過去2年間(2014年度、2015年度)、2年生と3年生を対象とするReadingの授業で語根リストおよび接頭辞・接尾辞リストを作る課題を学生に求めてきた。以下に紹介するのはその過程の一端である。筆者はこのリストを作成させたために学生の語彙力アップにつながった、その結果彼らが検定試験で高得点を取れるようになった、など数量的に英語力アップを実証しようとするものではない。しかしリストを作ったために、学生諸君は単語の仕組みに興味を抱くようになり、より積極的に英語学習に取り組むようになったと、感じている。具体的なリスト作成の過程を示す前に、以下に語形成に関する基本情報をまとめておきたい。

2. 語の構造に関する基本情報

2.1 語の構造と派生語形成のメカニズム

西川(2013)¹⁾によれば、新語の造語過程には以下のように、1. 複合語(Compounding)部門(例: paper knife, green house, railway station など)、2. 混交(Blending)部門(motel, smog, spork など)、3. 省略(Shortening)部門(coed, flu, fridge など)、4. 頭字法(Acronym)部門(UN, UNESCO, NASA など)、5. 逆成(Back-formation)部門(air-condition, edit, enthuse など)、6. 派生(Derivation)部門(dishonest, friendly, unkind など)の6部門があるとされる。これらのうち最も生産性の高い造語法は、おそらく最後の6. 派生(Derivation)部門、すなわち語根に接頭辞や接尾辞をつけて派生語を作る方法であろう。

少し長めの単語は、基本的に以下のような構造になっている。

(接頭辞(prefix))+ 語根(root)+(接尾辞(suffix))

語彙力アップの試みとしての「私の語根リスト」、「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成（中道嘉彦）

語根のみで語として成立する場合（例：kind）、それに接頭辞が付加される場合（例：unkind）、また接尾辞が加えられる場合（例：kindness）、さらに3つの要素すべてが揃っている場合（例：unkindness）がある。また接頭辞と接尾辞は付加される場合もされない場合もある。上の図式では（ ）内に入っている。

2.2 語根、接辞とは何か？

何気なく使っている語根の意味を確認しておく。まず『現代言語学辞典』で **root** 《語根》を引いてみよう。

1. すべての接辞 (**AFFIX**) を取り除いて後に残る語構造の中心的部分。これは共時的研究である形態論における語基 (**BASE**) と同義である。
2. 同一語源から派生した、形式と意味が似ている語群を比較して中核となる要素を抽出した結果得られる語形成上の単位。²⁾

上記 1. は *speaking*、*books*、*boy's*、*higher*、*talked* などの中で、イタリック体で示した屈折接辞を除いた部分、すなわち現在分詞になる前の動詞、複数形になる前の名詞、所有格になる前の名詞、比較級になる前の形容詞、過去形になる前の動詞などが語根に相当するだろう。これを語基と呼んでも構わない。また派生接辞が付加される場合であれば *admit*、*commit*、*emit*、*intermit*、*omit*、*permit*、*remit*、*submit*、*transmit* などの動詞の派生接辞（イタリック体の部分）を除いた部分で、語の中心的意思（この場合は *mit* 「送る」）を構成する部分が語根ということになる。

上記 2. に該当するものには *science* や *conscience* などがあるだろう。これらにはラテン語の *sciō* (=知る) に由来する *sci* が含まれており、同様の英単語には *conscious*、*conscientious*、*omniscient*、*prescience* などがある。この *sci* が語根ということになる。この事実を教えれば *science* を始め *conscience* などの意味や綴りを比較的簡単に覚えられると思う。幾つかの単語に共通の部分を見いだす、つまり関連性に気付くのが大切である。

『現代英語学辞典』の **Base** 《基体》の説明も参考になる。

「(2) 言語学上の用語としては、動詞にかぎらず、単語から接辞 (**AFFIX**) を除いた残りの部分、すなわち起源的にも意味的にも語の中核をなす部分をさす。この場合には語根 (**ROOT**) または語幹 (**STEM**) とも呼ばれる。語幹

と語根を区別する立場では、語幹は語から接辞を除いた残りをさし、語根は語幹のさらに元になる部分をさす。たとえば, attend, attention, extend, extent, extension, intend, intent, intention などの ten-が語根である。」³⁾

要するに長めの単語を幾つか比べて、綴りと意味が似ている部分があれば、語根である可能性が高い。これを語幹、語基、基体などと呼んでも差し支えない。教育現場では、語根あるいは語幹あたりが適切であろう。語基、基体などを含めると現場では混乱すると思う。そして学生には幾つかの単語の中に綴りが似た共通部分を見つけるよう指導し、単語間の関連を絶えず意識させることが重要である。

次に接辞(affix)の意味を確認しておこう。上で述べた語根(語幹、語基、基体なども含んで)に添加され、通常はそれ自体、単独で使用されることはない。語根との位置関係から英語には接頭辞(prefix)と接尾辞(suffix)がある。語根の前に付加されるのが接頭辞で、それ自体では単語として成立しない。接頭辞には語根の意味を変える機能がある。接尾辞は語根の後ろに付加され、語根の意味を多少変えるが、主たる機能は語根の品詞を変えることである。また接頭辞や接尾辞は複数個、連結されることも珍しくはない(例:independence, friendliness)。

学生には植物の比喩を用いて語根[語幹]や接辞の説明をしている。すなわち、語根[語幹]は樹木の根や幹のように安定しているのに対し、接辞は風に揺れる枝葉にも似て不安定、綴りが変化したり他の接辞と入れ替わることも可能である、と。

2.3 接頭辞に起きる変化=同化

接頭辞の中には語根冒頭の音が接頭辞末尾の音に影響を与えて、後者を変化させる場合、すなわち同化(assimilation)を起こすものがある。例えば in「中へ」+port「運ぶ」→import「輸入する」の場合、語根 port の冒頭の音は p(=無声両唇破裂音)であるが、これがその直前に来る in 末尾の n(有声歯茎鼻音)に影響を与え、m(有声両唇鼻音)に変化させている。つまり p の両唇という発音上の特徴が n の歯茎という特徴に影響し、結果的に n が m に変化しているのである。この場合有声と鼻音という特徴は保存され、歯茎のみが両唇に同化しているので部分同化(partial assimilation)である。Sub「下へ[に、で]」+port「運ぶ」→support「支える」の場合は接頭辞末尾の b が語根冒頭の p

語彙力アップの試みとしての「私の語根リスト」、「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成（中道嘉彦）と全く同じ音に変化しているのので、完全同化 (complete assimilation) である。このように単語の前半部分に同じ子音が連続する場合 (例: access, assimilation, attract, illegal, irregular, suffix など) には、接頭辞の最後の部分に完全同化が起きているのである。この仕組みを知っていると、単語の意味や綴りを覚える際、極めて有効である。

2.4 同化を起ししやすい言語、起しにくい言語

英語の語彙には英語本来語のほか、英語が属するゲルマン諸語やフランス語、ギリシア語、ラテン語などからの借用語が非常に多い。接頭辞・接尾辞についても、これらの諸言語由来のものが多いが、接頭辞の中にはその由来する言語によって同化を起ししやすいもの、起しにくいものがあるようだ。例えばギリシア語、ラテン語由来の接頭辞は同化を起ししやすいのに対し、ゲルマン系の接頭辞は同化を起さない。ここでは -n で終わる接頭辞に注目して、この現象を見ていこう。

まずギリシア語由来の接頭辞から。N で終わるギリシア語の接頭辞には pan-「汎、すべての」と syn-「共に」がある。Pan-については、panacea「万能薬」、pandemic「病気の世界的流行」、pantheism「汎神論」などの例で明らかのように、同化は起きていない。Pan-Pacific「汎太平洋の」は Pacific の P に影響されて *Pam-Pacific となっても不思議はないのだが、ハイフンで結合されていることからわかるように Pan と Pacific がそれぞれ独立した単位という意識があるためか、同化は起きていない。しかし pamphlet「小冊子」の pam-はどうだろうか？この単語を語源辞典⁴⁾で調べると「Gk *Pámphilos* (原義) beloved of all (☉PAN-, -PHIL): ☉ -ET」とある。「皆に愛される小さな(物)」が語源的意味である。Pamphlet の pam-の部分は本来 pan-であったが、そのあとに続く ph の唇音の影響で n が m に変化したもので、ここではしっかり同化が起きている。Syn-「共に」に関しては synchrony「共時性」や synonym「同意語」などは syn-のままである。それに対し sympathy「同情」、symphony「交響曲」、symbiosis「共生」、symmetry「対称」のように、語根が唇音で始まっている場合、それに同化して sym-に変わっている。このように pan-と pam-、syn-と sym-は左側が基本形で右側が音声環境によって同化を起こした形であることがわかる。

次に n で終わるラテン語由来の接頭辞を取り上げよう。まず con-である。多くの辞典では com-を見出し語として示し、con-をその異形として扱って

る。古典期ラテン語の前置詞 *cum* に由来するのだから、**con-**とするのは当然かもしれない。しかし **con-**を基本形とし、次に来る音の影響で **com-**に変化すると考えた方が、少ないルールでより多くの事象を説明できる。そのため拙論では **con-**を基本形と考えたい。**Cord**「心」に **con-**「共に」が付いて **concord**「協調、心を1つにすること」、**duct**「導く」に **con-**が付加して **conduct**「楽団などを指揮する」が派生するが、この場合には同化が起きていない。前者の場合は **n** と **c (=k)** の調音位置が遠すぎて同化は起きず、後者の場合 **n** と **d** 両者の調音位置が歯茎、すなわち(同器官的(*homorganic*))なために、歯茎音の **n** がわざわざ両唇音の **m** などに変化することはありえない。それに対して **con-**「共に」+ **bine**「2つ一緒に」→ **combine**「組み合わせる」、**con-**「共に」+ **pany**「パン」→ **company**「共にパン(を食べる仲間)」、**con-**「共に」+ **mit**「送る」→ **commit**「委託する、関与する」などは次に来る両唇音の影響を受けて同化を起こしている。**colleague** や **collaboration** などにも同化による綴りの変化が見てとれる。さらに **n** で終わるラテン語系接頭辞には **en-**「…にする」、**in-**「…ない」、**in-**「中へ」がある。**En-**が同化を起こして **em-**に変化するものには **embody**「具体化する、体現する」、**employ**「雇用する」などがある。同化が生じた **in-**「…ない」のケースには **illegal**「違法な」、**imbalance**「不均衡」、**immobile**「動かない」、**impossible**「不可能な」、**irregular**「不規則な」などが、**in-**「中へ」には **illuminate**「(中を)照らす」、**imbibe**「飲み込む」、**immigrate**「(入国)移住(する)」、**import**「輸入(する)」、**irrigate**「(中へ)水を注ぐ、灌漑する」などがある。筆者が大学生の頃感じた不思議は、これで解決される。ラテン語由来の接頭辞の場合、**con-**は **com-**や **col-**、**cor-**など、**in-**も **im-**や **il-**、**ir-**などの同化を経た異形を数多く持ち、ギリシア語より多様性に富んでいる。

以上のようにギリシア語やラテン語由来の接頭辞の中で **n** で終わるものは次に来る音の影響で **m** に変化する、すなわち同化を起こす場合が多い⁵⁾。それに対して **n** で終わるゲルマン系の接頭辞は同化を起こさないようだ。**Input**「入力(する)」、**inpatient**「入院患者」、**inbreathe**「吸い込む」などは ***imput**、***impatient**、***imbreathe** となっても不思議はない。しかし **in-**のままなのは、それがゲルマン系の接頭辞だからだ。同様に **un-**「…ない」もゲルマン系接頭辞で、これも同化を起こさない。**Unbroken**「壊れていない」、**unmanned**「無人の」、**unprecedented**「先例のない」など、ギリシア語やラテン語だったら同化を起こすようなケースでも同化は起きていない。人懐っこくて誰とでもす

語彙力アップの試みとしての「私の語根リスト」、「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成（中道嘉彦）
 ぐ友達になれそうなラテン系と、なかなか打ち解けにくいアングロサクソン
 系の血の違いであろうか？

2.5 語根と接辞の中間的存在=連結形

語根と接辞の中間的な存在に連結形がある。『リーダーズ』³には「**combining form** 連結形 ((複合語・派生語の構成要素；bibliophobia の biblio-と-phobia のように常に他の要素と結びついて用いられる；連結形は接頭辞・接尾辞に比べて意味が具象的で連結の仕方が等位的))」とある。呼び名も辞書などによってまちまちで、連結形(『リーダーズ』³)、連結辞(西川、2013)、連結要素(『ジーニアス』⁴)、連結詞(『プログレッシブ』⁵)、複合要素(『ウィズダム』³)などがある。

同一の見出し語でも辞書によって連結形(あるいは類似の表現)または接辞として扱われている場合がある。以下に4冊の英和辞典を並べて、ラテン語とギリシア語由来の数字関連語がどのように表記されているかを比べてみた。Tri-はラテン語とギリシア語に共通である。

見出し語	uni-	bi-	tri-	multi-	mono-	di-	poly-
『ジーニアス』 ⁴	接頭辞	連結要素	連結要素	連結要素	連結要素	連結要素	連結要素
『プログレッシブ』 ⁵	連結詞	接頭辞	連結詞	連結詞	連結詞	接頭辞	連結詞
『ウィズダム』 ³	複合要素	接頭辞	接頭辞	複合要素	複合要素	接頭辞	接頭辞
『リーダーズ』 ³	<i>pref</i>	<i>pref</i>	CF*	CF	CF	CF	CF

CF*=*comb form* (=combining form)

4冊の辞典で意見が一致しているものは multi-と mono-のみで、他の5つの見出し語は扱いがばらばらである。連結要素と連結詞は combining form を、複合要素は compounding を意識した表示のように見える。調査対象を広げれば、事態は一層複雑になるであろう。見出し語によって品詞表記が異なるのは、学生がリストを作る際にも、また教員が提出されたリストを評価する場合にも問題が生じる。明確な解決策は見出せていないのが、現状である。一時しのぎではあるが、参照する辞典を限定する策が考えられる。

また各辞書で combining form の訳語を見ると全て「連結形」になっている。

実際に辞書で使っている品詞表示を比べると以下のように不一致が見られる。

	< combining form の訳語 >	< 品詞表示 >
『ジーニアス』 ⁴	連結形	連結要素
『プログレッシブ』 ⁵	連結形	連結詞
『ウィズダム』 ³	連結詞	複合要素
『リーダーズ』 ³	連結形	<i>comb form</i>

初めの3冊の辞典に関して言えば **combining form** に「連結形」という訳語を与えているのであれば、品詞表示も「連結形」とする方が一貫性を保てるであろう。『リーダーズ』³のみ、訳語と品詞表示が一致している。

また西川⁶⁾は **Anglo-**という見出し語が欧米で出版されている8種類の辞書でどのように分類されているかを表にまとめている。その結果、2種類が接辞として、6種類が **combining form** として扱っていることがわかった。西川はさらに **-arch** から **-worthy** に至る20個の語尾の扱いも8種類の辞書で調べた。その結果、接辞としての記載あり、接辞としても **combining form** としても記載なし、**combining form** としての記載あり、複合語の構成要素としての記載あり、のように4通りの扱いとなっていることがわかった。これらは欧米の英々辞典も日本の英和辞典も連結形 (**combining form**) の扱いに苦慮しているようである。

3. リストの作成過程

3.1 「私の語根リスト」の作成

1 学期の課題として語根リストを作成した際、学生に指示した事項は以下の通りである。

- 1) 語根 (**depress, express, impress, oppress**などの共通部分**press**が語根と考えられる) を最低40個集め、それらを**Word**に入力する。集めたら、語根をアルファベット順に並べる。
- 2) 見出語は太字で、その他の派生語、意味表示、説明などは細字で印字する。
- 3) 派生語は最低3つ集める。語根との意味の関連に気づかせるため、派生語の意味も記述する。
- 4) 毎日の学習の中での気づきが大切。少しずつ、コツコツ入力していく。

語彙力アップの試みとしての「私の語根リスト」、「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成（中道嘉彦）
上記1)-4)を具体的に示すと以下のようなになる。

ject「投げる」 派生語：inject「投入[注入]する」、objection「反対、異議」、
project「計画、企画」、reject「拒否する」、...

...

port「運ぶ」 派生語：export「輸出(する)」、import「輸入(する)」、report
「報告(する)」、support「支援(する)」、transport「運搬する」、opportunity
「機会」、portable「運べる」、portage「運搬」、important「重要な」、...

学生にはいろいろな授業で出くわした単語、自主的に学習している教材で意味を調べた単語など、該当する単語を見つけ次第、リストに追加し「私の語根リスト」を充実させるように指示した。締め切り直前に慌ててリストを作成するのではなく、普段の勉強で見つけた該当単語を順次リストに載せ、時間をかけて充実させていくことが重要である。さらに大切なことは、複数の単語の中に同じ要素(=語根)を見つけ、それらの単語がお互いに関連していることを自覚・納得することである。そのような発見する喜びを味わえば自主的な学習につながり、その結果単語の定着が良くなり、ひいては初見の単語でも意味が推測できるようになると期待される。筆者が提示した見本(語根をアルファベット順に並べる、見出語は太字で示す、など)に従ってリストを作成することが難しく、学生独自のフォーマットでリストを作ってしまう学生がいる。筆者は、指示通りに何かを完成させる訓練も学生には必要だと考えている。学生オリジナルのリスト作成を防ぐため、学期の中間の時期に仮リストを提出させ、それを添削して返却し、最後に統一的なリストを完成するよう指導した。

3.2 「私の接頭辞・接尾辞リスト」の作成

2学期に接頭辞・接尾辞リストを作成した際、学生に指示した事項は以下の通りである。

- 1) 接頭辞と接尾辞を合わせて最低40個集める。
- 2) 派生語は最低3語入れ、発見次第リストに追加する。
- 3) 見出し語は太字で、その他は細字で。
- 4) 見出し語や派生語はアルファベット順に並べる。

5) 発音が変化する接頭辞の情報、接尾辞がどの品詞に付加されるかの情報も加える。

上記1)-5)を具体的に示すと以下ようになる。

<接頭辞>

ad-「...の方へ」 派生語：adapt「...を適合させる」, adjust「...を調整する」, admire「...を賞賛する」, ...

cの前でac-に 派生語：access「接近」, ...

fの前でaf-に 派生語：affect「...に影響する」, ...

gの前でag-に 派生語：aggressive「攻撃的な」, ...

pの前でap-に 派生語：appeal「...に訴える」, ...

qの前でac-に 派生語：acquire「...を獲得する」, ...

sの前でas-に 派生語：assist「...を助ける」, ...

tの前でat-に 派生語：attract「...を引きつける」, ...

...

vice-「代理, 副, 次」(官職を示す名詞に付いて) vice-chairperson「副議長」, vice-president「副大統領, 副社長」, viceroy「国王代理, 副王, 太守」, ...

<接尾辞>

-able「...できる」(動詞や名詞に付いて形容詞を作る) 派生語：acceptable「受け入れられる」, favorable「好意的な」, writable「書き込み可能な」, ...

...

-y「...の特徴を持った」(名詞に付いて形容詞を作る) 派生語：angry「怒った」, noisy「騒々しい」, sunny「晴天の」, ...

基本的には1学期の語根リスト作成に準じるが、接頭辞に関しては語根冒頭の音に影響されて接頭辞末尾の音に変化する、すなわち同化が起きることがある、接尾辞が付加されると語根中の母音字が省略される(enter + ance → entranceなど)、語根末尾の母音が省略されること(fame + ous → famousなど)などを説明した。接辞はハイフンがついた形で辞書に掲載されている。ハイフンは語根と接辞が結合する際の接着剤のようなもので、意味のある記号であることを教えた。辞書指導が十分に行われていないせいか、ほとんどの学

語彙力アップの試みとしての「私の語根リスト」、「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成（中道嘉彦）
生が辞書に載っているab- や-al など付加しているハイフンの意味がわからなかった。締め切り間際に急いでリストを作るよりは、普段からコツコツと該当する接辞を集める方が出来栄えは良いようである。

4. 終わりに

1つ1つ英単語を覚えていくのは、効率も悪いし、定着率も低い。しかし、1つの語根にさまざまな接頭辞や接尾辞がつくことによって数多くの派生語が生まれること、接頭辞と語根の間には同化が起き、その結果、綴りにも変化が生じることを学生が知ったとき、単語を理解し覚えることそれ自体が興味深いものになり、自発的な学習につながるのではないだろうか。

「最低 40 個」には特に根拠があるわけではない。40 個ほど集めれば語根や接辞に注目するようになるだろうし、課題としてもそれほど無理難題ではないだろう。「アルファベット順に並べる」ことを徹底することも大切だと思う。電子辞書世代にはアルファベットの順番を知らない人もいる。確かに知らなくても辞書は引ける。しかし参考文献のリストや索引を始め、世の中にはアルファベット順に分類しなければならないもの、あるいはアルファベット順に並べられているものが数多くある。アルファベット順など教えなくてもいいのでは？、という一部の意見には到底賛成できないのである。

書店には「語根で覚える英単語」の類いの参考書がたくさん置かれているし、ネット上にも言葉に関する数多くのサイトが存在する。それらからコピーしてリストを作るのではなく、教材の英文から課題で求められている単語を収集し、徐々に自分のリストが充実していく喜びや楽しみを味わってもらいたい。その意味での「私の語根リスト」や「私の接頭辞・接尾辞リスト」が期待されているのである。

語根や接辞を意識させることは辞書指導の観点からも重要である。学生が辞書を引くのは単語や語句の意味を調べる場合がほとんどである。それに対して、発音やアクセントを調べる、文法や語法の解説や例文を読む、語源まで調べる学生はそれほど多くないだろう。まして語根や接辞を調べることはめったにないであろう。しかし語根を調べるには辞書の語源欄が参考になるし、辞書に載っている接辞の情報も大切である。語源や接辞の情報からギリシア語やラテン語への関心が芽生えれば、素晴らしいことだと思う。そうすれば検定試験での高得点取得、留学の実現、真の英語力アップなどにつながる

と思う。

2学期末試験の際(2016年2月初旬)、「私の語根リスト」と「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成課題に関する簡易アンケートを実施した。アンケートの質問項目とその集計結果は拙論の最後をご覧いただきたい。8割ほどの学生が好意的な反応を示してくれたようだ。この課題は始めたばかりである。今後、いろいろな知見と経験を積み重ねて、より良いものにしていきたい。

最後にラテン語の *levis* 「軽い」やその動詞 *levo* 「軽くする、揚げる」を語根とした英単語を紹介したい。*Levis* や *levo* が物理的な「浮遊、上昇」などの意味だけでなく、精神的・心理的な「安心、苦悩の軽減」などを表す単語も生み出していることが理解できるだろう。

Lever 「てこ」、*levitate* 「浮遊させる」、*levity* 「軽率」、*levy* 「取り立てる」、*alleviate* 「(問題・苦痛を)軽減する」、*alleviation* 「軽減、緩和」、*elevate* 「高める」、*elevation* 「高さ、海拔」、*elevator* 「エレベーター」、*Levant* 「レヴァント、地中海東部沿岸地方」(過激派組織 IS の別名 ISIL に含まれる。元来は欧州から見て朝日の昇る方面を漠然とさす言葉)、*maglev* 「磁気浮上式の」(*maglev train* リニアモーターカー)、*relevant* 「関連がある」、*relief* 「安心」、*relieve* 「救済する」、*relieved* 「安心した」、*reliever* 「痛みなどを緩和するもの」等々。

註

- 1) 西川、p. 12.
- 2) 『現代言語学辞典』、p. 557.
- 3) 『現代英語学辞典』、p. 115.
- 4) 『英語語源辞典』、p. 1026.
- 5) 多様な同化を起こすラテン語系の接頭辞には *ad-* 「…の方へ」(*adapt*, *affect*, *aggressive* など)、*ob-* 「…に逆らって、など」(*object*, *occur*, *oppose* など)、*sub-* 「下へ[に]」(*subject*, *success*, *support* など)がある。ラテン語の末裔であるイタリア語でも同化はよく起きる(ラテン語 *octo* 「8」がイタリア語では *otto* になる、など)。
- 6) 西川、pp. 40-42.

参考文献

- 石橋幸太郎編『現代英語学辞典』成美堂 1973
井上永幸・赤野一郎編『ウィズダム英和辞典』第3版 三省堂 2013
大名力『英語の文字・綴り・発音のしくみ』研究社 2014
小西友七・南出康世編『ジーニアス英和辞典』第4版 大修館書店 2006
瀬戸賢一・投野由紀夫編『プログレッシブ英和中辞典』第5版 小学館 2012
瀬谷廣一『語根中心英単語辞典』大修館書店 2001
高橋作太郎編『リーダーズ英和辞典』第3版 研究社 2012
田中春美編『現代言語学辞典』成美堂 1988
寺澤芳雄編『英語語源辞典』研究社 1997
西川盛雄『英語接辞の魅力 語彙力を高める単語のメカニズム』開拓社 2013

アンケート

このクラスの課題として「私の語根リスト」（1学期）、「私の接頭辞・接尾辞リスト」（2学期）を作成しましたが、それについて意見を聞かせてください。下記の質問を読み、該当する評価項目を1つ選び、□にチェックを入れてください。これは授業の評価には関係しません。

- 1) この課題をやってみて、英単語の構造に対するあなたの理解は深まりましたか？

	2年生	3年生	全体
<input type="checkbox"/> 非常に深まった	8 (32%)	5 (17.2%)	13 (24.1%)
<input type="checkbox"/> どちらかといえば深まった	13 (52%)	22 (75.8%)	35 (64.8%)
<input type="checkbox"/> どちらとも言えない	3 (12%)	1 (3.4%)	4 (7.4%)
<input type="checkbox"/> どちらかといえば深まらなかった	1 (4%)	1 (3.4%)	2 (3.7%)
<input type="checkbox"/> 全く深まらなかった	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

2) このリスト作成はあなた自身の英語学習に役立ちましたか？

	2年生	3年生	全体
<input type="checkbox"/> 非常に役立った	7 (28%)	5 (17.2%)	12 (22.2%)
<input type="checkbox"/> どちらかといえば役立った	12 (48%)	20 (68.9%)	32 (59.3%)
<input type="checkbox"/> どちらとも言えない	5 (20%)	3 (10.3%)	8 (14.8%)
<input type="checkbox"/> どちらかといえば役立たなかった	1 (4%)	1 (3.4%)	2 (3.7%)
<input type="checkbox"/> 全く役立たなかった	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

以上です。ご協力ありがとうございました。